

開催報告

アイタクテと ナリタクテ 上映&トークセッション



LGBTかもしれない
小学生とその親や
先生たちの物語

実施概要

開催日時	2024年1月28日(日) 14:00~15:45 (開場およびZoomオープン/13:30)
実施形式	会場とオンライン配信(Zoom)での ハイブリッド開催
会場	三重県総合文化センター 文化会館1階「レセプションルーム」 (三重県津市一身田上津部田1234)
参加人数	会場:44名様、オンライン:57名様

- 開催内容
- 開会のご挨拶
 - 関根信一氏によるご挨拶・作品紹介
 - 『アイタクテとナリタクテ』映像上映
 - トークセッション
 - 質疑応答

ゲスト



関根 信一
演出家・劇作家・俳優
劇団フライングステージ 代表



後藤 純一 (モデレーター)
ライター / エディター

人魚姫の主演をやりたいと言う男の子を主人公にした児童向け演劇『アイタクテとナリタクテ』の記録映像(作・関根信一、座・高円寺 夏の劇場05 日本劇作家協会プログラム 劇団フライングステージ第47回公演)の上映とトークセッションを通じ、世間の異性愛規範やジェンダー規範にとらわれず、ありのままの性を生きることについての理解や共感を深める契機となることを目的としています。

上映作品は子ども向けではあるものの、周りの大人たちに理解があれば、子どもたちが自分らしくのびのびやっいていけるということを示唆する内容であるため、親世代や教師など子どもに関わることの多い人たちに対し、こうしたメッセージが届くことを願い、本イベントを企画・実施いたしました。



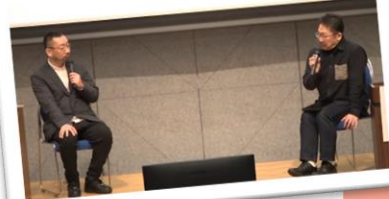
作品紹介

『アイタクテとナリタクテ』

タイガは小学6年生。今年の学芸会で『人魚姫』をやることに。すると、友達のショウが人魚姫の役をやりたいと手を挙げた。ざわつくクラス。「男が人魚姫とか、ないでしょ？私で決まりよね」と立候補する女の子。タイガやショウの親友ユウセイは、「そんなことないよ。面白いかもよ」とショウをかばい、人魚姫の役はオーディションで選ぶことに…

王子様に会いたい？女の子になりたいの？
パパが2人いるボクと友達の物語

トークセッション概要



『アイタクテとナリタクテ』に込められた思い

劇中で3人の子どもたちが「分からない」という言葉を何度も言い、それが本当に「分からない」のかも分からない…これを子どもに観てもらおうときに、色々なものが「揺れている」状況の中で、そこで決めて一生を生きていく必要はないし、分からないという気持ちのままいていいんだ、ということ传达了。セクシュアリティやジェンダーの部分が分からないということは、子供の頃だけではなく、大人になっても同様です。

「男・女」、「L・G・B・T・Q」という枠にきっちり入るわけではなく、性は「グラデーション」で、そして変化していく。この枠に入らないことで孤独を感じることもあるかもしれないが、それは自身だけではなく、誰もが自分の生き方については一人一人孤独を抱えている点で「決してひとりではない」ということを感じて欲しいと思っています。

また、この作品ではタイガくんがゲイのカップルに現在育てられていることにモヤモヤしつつ、最後は父との絆を手に入れていく。そこはゲイとかバイセクシュアルとは違ったところで、その部分が大事であると描きたかった部分です。(関根 信一さん)

ジェンダー規範と異性愛規範による当事者の困難

自身の経験からも、「男らしく」「女らしく」といった世間の「ジェンダー規範」によってマイノリティ、特に子どもたちを苦しめている部分があり、そこがリアルに描かれていると感じました。また、恋愛は男女であるものという「異性愛規範」に対しても同性愛者として苦しい思いをしてきた経験がありますが、世の中には映画やドラマなどいろいろな場面で見られます。(後藤 純一さん)



この作品については、子どもと、子どもを育てる親に観てもらいたいと考え、恋愛に深く踏み込んでいませんが、タイガくんのお父さんが2人いるということは強調しようと思ひ、またタイガくん自身はお父さんや友達とは違い当事者ではないということを描きたかった。観ている子どもたちには、自分は当事者ではないし、LGBTも良く分からないが、その取っ掛かりとして、タイガくんのような当事者性の無い中で、友達は当事者かもしれないが、友達が大好きですと言えるような主人公にしようと第一に考えました。観てる子どもたちにとって当事者的、非当事者的な属性それぞれに届く設定ではないかと思っています。(関根 信一さん)

親や先生などの理解やサポートなど、周りの環境の重要性

当事者からすると周りの大人(親や先生など)が、どう受け止め接してもらえるかによって生きやすさが左右され、カミングアウトができる・できない、自分らしく生きる・生きられないなどが大きく影響します。周り人の理解やサポートが非常に重要であると感じています。昔は、周りの理解やサポートは無く孤独感に苦しめられてきましたが、今は、このようなお芝居に触れることや、世の中にもたくさんの情報があるので、良い時代になったと思います。(後藤 純一さん)



自身も学生時代は、女の子っぽいということではじめられ、学校に行かなくなった時期もあった。その頃の自分に届けたいという気持ちで劇団をやっているのは間違いなくて、どんな人でも主人公になれるという事を意識して作品を作っています。幼少期は自己肯定感が低かったので、そういったことが分かればもっと生きやすかったのではと感じています。

ただ、時代は自然に自動的に良くなっていくものではなく、良くしようと思ひている大人がいるからこそなので、人任せにするのではなく、自分が時代を良くしようとする意識が大事だと思います。(関根 信一さん)

主な質疑応答

職場の人や家族など、身近な人に性の多様性について知ってもらうために、啓発としておすすめできる書籍や映画があれば教えてください。

絵本に色々面白くもあり、オス同士のペンギンのカップルが卵を育てる『タンタンゴはパパふたり』、赤・青・黄色の国がそれぞれの違いを認め合う話の『まざっちゃおう!』、『あおいらくだ』は青い色の変ったらくだの考え方や生き方が、素敵な絵と文章で描かれています。硬めな本に疲れたというときには絵本を見てもらうのが良いのでは。(関根 信一さん)

昨年新書で出された『トランスジェンダー入門』は現在の間違っただけの情報に對し的確に答えてくれ、当事者のリアリティもよく分かるのでおすすめ。(後藤 純一さん)

性の多様性や、その悩みに寄り添えるようになるための関わりポイントや大切なことがあれば教えてください。

多様性を尊重するということは勿論だが、他の様々なことも含め、(大人は)その子の幸せを願うもの。多様性やジェンダーの悩みで揺れている子にどう向き合うかと言えば、答えはひとつではなく変化すること、グラデーションがあることも含め、周囲の大人が情報としてしっかりしたものを持っている、それを必要な時に提供できることが大事なのは。(関根 信一さん)

ご参加
頂いた
方からの
お声

- 演劇を見るだけではなく、トークセッションをすることによって、より理解が深まった。(50代/会場参加)
- 色々大人が子どもの明るい将来のために様々な視点で悩むことで、やさしい社会が作られていくと思ひます。私は私の立場でがんばりたいと、改めて思ひました。(40代/オンライン参加)
- 周りをサポートしていく大人の存在が大切だということに改めて気づかされました。(40代/会場参加)
- いつか、マイノリティという言葉もなくなり、誰が誰を好きになっても、どんなふうに関わりを表現しても、その人の心も、その人の周りの人の心も大切にされる社会になることを願ひます。(40代/オンライン参加)
- 区分したがる自分の考え方を改めていくことが必要と感じた。一人ひとりが自分らしく生きることができる環境づくりが必要。(50代/会場参加)